

私は抑留、

妻と子は生き別れ

四十年の苦労働われる

宮城県 村 上 光 郎

私は末子として宮城県小牛田町で生まれ、両親と一緒に住んでいました。兄は東京に出て早稲田大学を卒業し新聞社に勤めていました。戦後私は、義父の土地のある仙台駅の近くに住むようになり、その後、現在の小牛田町に住み、戦後の恩給欠格者団体の仕事を十八年間従事して現在に至っております。

私は軍人として関東軍で、そして終戦後、ソ連に抑留、満州に同行していた家族は在留邦人として長い期間苦勞し、ようやく我が子との対面することができました。また、その間の妻の苦勞は……。

我々の時代、軍隊へ行った男子は死を覚悟して戦地へ行ったのですが、同行の家族や、開拓団等の終戦後の苦勞は忘れられません。この苦しみを記録として留

めておかねばならないと痛感するものであります。

私の実家は、江戸時代は雜貨など手広く商っている商家で終戦まで続き、祖父と父は村長になったりしていました。

私が関東軍の将校として満州に赴任したのは、昭和十九（一九四四）年の十二月頃でしたが、当時の国策で満州に新天地を求めて多くの人が、パスポートも不用、安易な気持ちで皆渡満していきました。家内や子供も、私の任地へと内地から来たのでした。もちろん、日本が負け、多くの在留邦人が塗炭の苦しみを suffer などという事は予想もしていなかったのです。

ソ連軍は、日ソ協定を破り、三方面から国境を突破し侵攻して来ました。私は、関東軍の将校集団と共に行動しましたが、ソ連軍が入って来ていました。それは、昭和二十年八月十七日で、日本軍は降伏の命が出たので、ソ連軍の指示、命令に従わねばならなくなっていました。

郭河から牡丹江^{ポダンコウ}へ歩いて戻りました。私は牡丹江の

郊外で、作業隊要員として残ることとなり将校集団とは別れました。作業隊は三十六の作業隊集団に分けられました。一個隊、千人にして三十万人だが、実際には作業隊員は六十万人もおったでしょう。その人達を全員ロシアに連れて行き、千人を中・小隊に分けたのです。

作業隊は、民主化と称し組織をバラバラにされたのですが、私はその時、将校集団として残ることとなり、東欧地区（ロシア分）のウクライナ付近のタンボスという市の郊外の松林にある将校集団のバラックに入ったのです。収容された数は三千人位だったと言われていましたが、佐官・尉官だけで、将官は別になっていました。

その収容所は廠舎式の建物で、二階造りに改造され、監視用の望楼が作ってありました。私達はその松林の中で半年位生活しました。強制労働は無かったのですが、朝、夜の人名点呼があり、我々は管理されていました。

林の中で自家用の野菜作りをするのですが、畑は広

く、地味は肥料無しでも良かったので、結構収穫はありました。まあ、自給自活を監視の中でされていたのでしょうか。

その後、モスクワ近くのカザン地区に移動を命ぜられました。ダニューーブ河の支流の沿岸でありました。

そこは、廠舎ではなく、帝制時代の面影？のある女子大学、煉瓦造りの五階建ての家屋に収容されました。

そこでも強制労働ではなく、自活用の野菜作りが日課でありました。そのため、ロシア語を教わったり、抑留将校の中には、政治・経済・科学等、何でも専門家がいたので、サークルを作り勉強する人もいました。また、何もしない人、寝たり、昔語りをしていた人もいました。

中には、勉強をしてロシア語を会得した人もいました。収容所は、モスクワに近かったのですが、二年半の抑留生活中、ロシア人との接触は無く、収容所から外へは出られませんでした。しかし、体験学習的にロシア人の農家に寝泊まりし、その家の手伝いをするこ

ともできませんでした。私も十日位行ったのですが、スラブ民族は個人としては人間的に良い。二年半の生活でしたが、種蒔きから、収穫まで同一の農家にはおらず、交替で生活をしました。しかし、その間、我々には共産主義のことを教えたり、共産主義的教育はありませんでした。ソ連側も将校には批判能力もあり、そのような教育の成果は期待していなかったのかもしれない。

しかし、作業隊の将校は苦勞しました。民主主義だといって、階級はなく、皆同じだとして、むしろ将校であることにより苦勞した人もいました。

また抑留地も、ベルホヤンスクの、カムチャッカへ行行った人もいて、寒さに苦しんだ人や北極圏へ行って苦勞した人もいました。カムチャッカでは収容所も不潔、寒くて食う物は無く苦勞したといえます。従って、抑留といっても、随分違った生活をしていたので、ウラル地方は丘陵地帯で、貨車で三、四日間も、そんな所を通りました。

現地で実体験し、現地の人々から直接生の声を聞

き、現実を見てきたのですが、理想と現実の違いを、つくづく感じました。彼らが言うには「共産主義はピンはね」「上は働かない」「ピンはねした物を他の部落へ持って行って売る。それが、上の者の恩恵となる。」「各々の責任者がピンはねをする。」共産主義とはピンはねの制度か?という当時の現状で、彼らの言った言葉は、それを裏付けていたようでありました。

私の居た所は、シベリア鉄道の沿線で、カザンは大都市の郊外で、文化は開けていました。一般のロシアの罪人が、カムチャッカへ連行されて行くのを私は見ました。顔を出して、我々日本人に話しかける。その人達は大した罪を犯していません。万引きや、かっぱらい程度でした。その程度の罪でも、カムチャッカ送りである。この人達が、囚人列車で送られて行く。当時の人は「反対する者はすべて罪人」であるという。強制的に、カムチャッカの北の鉱山(金鉱)へ送られるという。その人数は随分いました。西へ連れて行かれる我々と、擦れ違いで行く。シベリア鉄道で二十八

日間もかかった我々の列車と、東へ行く囚人列車、罪人列車とは人事でないという感情を今でも持っています。

一方、我々の生活についてももう少し話をしてみます。自家作業で収穫した野菜は、キャベツも玉葱も大きくて重い。それをトラックで運ぶのではなく、皆で背負って運ぶのです。炊事も日本人（もちろん将校も）自身でやりました。炊事場は元女学校の跡ですから、当時としては完備していたといえるのでしょう。

食事は三食なのですが、朝・昼・晩ではない。一日のうちに三食を食べさせれば良いという考えでありました。順番が来ると、夜中に食事を食べさせられることもあります。

食事の内容は、アルミ碗にお粥が一杯、ソ連軍は満州関東軍の倉庫にあった日本の米（脱穀してない）を、棒でついて粃殻を取った物と、高粱コウリヤンをグダグダに煮る。おかずは無く、皆雑炊にしてありました。塩分はあったのですが、野菜は不足している。そのため病気になる死んだ人もおりました。体の弱い人は命

を持ちこたえられないのでした。

我々のいた所は、東ヨーロッパの一部であったのですから、北といっても、シベリアより恵まれていましたが昭和二十年の冬から、同二十一年の春までは、気候にも馴れず、給与も悪かったため、犠牲者も出ました。しかしその後、糧秣倉庫の管理が、ロシア人から日本人に委せられるようになってから改善されました。二年の間には、この気候、生活にも慣れ、体も順応して来ました。

自活農業や道路建設の仕事も回って来て作業をしたこともありました。五、六キロの土を、板に載せた運搬具を二人で運ぶ、溝をさらって、その土を運ぶのである。監督のロシア人は、「早くやれ」ということは言わなかったし、我々將校団に対しては概して寛大でありました。

私は体が丈夫でした。帰る時も將校集団はシベリア鉄道で、ウラジオストックまで来ました。港に着いた時、シンパの連中が来て、共産党の教育をしていたの

であります、我々は誰も行きませんでした。演説している連中も本気であるのか、早く帰る一つの手段であったのか分かりませんが、我々は、その実態を二年間見聞し、体験していたので、そのような教育の場へ行く人は一人もいませんでした。

このようにして、私は、幸いにも他のシベリア抑留者より恵まれた状況で、無事故郷へ帰って来たのでありましたが、妻や子供は、私が想像もしていなかった苦難の体験をしていたのを帰ってから知りました。しかも、長女は残留孤児として、何十年も苦難の人生を歩んでいたのです。その状況は次の通りであります。

昭和六十年十一月二十三日(土)の新聞、(読売・朝日・毎日新聞その他)は、「村上さん夫婦と征子さん(長女)親子対面」と、喜びの記事を大きく掲載していました。

各新聞は、それぞれ、次のような見出しで報道していました。

独習十年の母、感激の中国語、

高興極了(ガオシンジィラ、非常に嬉しい)

「さらわれた征子だ」抱きしめ、ただ涙、

夏済華さんの母村上ひさのさん

中国語が思わず 生存確認した独習実る

征子さん 四十年ぶり故郷の夜

父母に囲まれ、ぐっすり 日本への永住望む

残留孤児・村上さん 永住帰国へ強い希望

四十年ぶり「水いらず」

夏さんは制子さん―中国孤児

小牛田(宮城)の両親が確認 写真の祖母そっ

くり 征子さん親子 左利きも決め手に

村上さん夫妻と征子さん

娘の肩にやさしく手「祖国で親孝行します」

朗報再び……小牛田の村上さん判明「残留孤児」

もしや……母の執念実る 医師の夫らと永住

「親孝行したい」「看護婦で恩返しを」

母は中国語で「うれしい(高興極了)」

この日のために 十年間も勉強

目を真っ赤に村上征子（夏濟華）さん

その記事はこうでした。

「娘よ、ありがとう。よくぞ生きていてくれた」

「あの時、お母さんの手作りワンピースにポケットをはいていた幼児がこんなに大きくなりました」

東京代々木の国立青少年センターで行われている肉親捜しで二十二日、親と娘が四十年ぶりに巡り会った。

父の名は、小牛田町青生梅木、団体職員村上光郎さん（六十九）。母の名は、久野さん（六十三）。娘の名は中国名で夏濟華、日本名は長女の村上征子さん（四十三）。夢にまで見た両親と、自分と良く似た妹の主婦高橋伸子さん（三十七）の三人にいっぺんに出会えたりれしさに、征子さんの涙は流れ続けた。

征子さんは、同日夜、父母の家に帰り、一家団欒のあたたかい食卓についた。

エクボの口元妹さんそっくり

喜びの記者会見は午後三時四十三分から始まった。

左右を両親にエスコートされて対面室に入った征子さんの目はすでに真っ赤だった。妹の伸子さんが椅子に座らせてやるなどかいかいしく世話をやく。喜びの声が一一人から出た後、ひさのさんが征子に頭を下げて言った。

「高興極了（ガオシンジエラ）」とでもうれしい。とたんに、どっと泣き崩れる征子さん。一分、二分。父も母もハンカチを握りしめるばかりだった。

決め手となったのは、征子さんが左利きなこと、エクボがあること、祖母や伸子さんにそっくりなこと。

伸子さんと征子さんのエクボのある口元はウリ二つだ。伸子さんが「鼻筋は父に似ているんですよ。姉が美しいので、私の身内じゃないと思ったくらい」と補足して、明るい笑いを呼ぶ。

ふっくらとおだやかな表情の母は、この日のために十年前からラジオ講座で中国語を勉強したという。照れながら「いつか征子と中国語で話したいですね」。この言葉に征子さんは、また、声を出して顔をおおった。

征子さんと両親との別れは思いがけない一瞬のことだった。ソ連参戦後、ひさのさんと征子さんは吉林省の収容所に入ったが、昭和二十一年一月七日（ひさのさんはこの日付をスラスラと言った）征子さんは中国人にさらわれてしまった。そのころソ連に抑留された光郎さんも露知らぬことだった。今回のように、両親そろって娘と対面できた例は少ない。「この幸運を大切にしたい」征子さんは永住帰国の希望をきっぱり述べていた。

と、このような記事は、各新聞に記載されていました。

村上さん夫妻は、十六年前の親子対面の様子を、新聞記事を見ながら、戦後の苦労を切々と話されました。

村上さんは、将校として、昭和十九年十月、満州国牡丹江省寧安県の第十一航空情報連隊に赴任。夫人のひさのさんは、生まれて間もない征子さんを連れ、夫光郎さんの後を追って十二月に渡満されたのでありま

す。

しかし、昭和二十年八月七日、ソ連は条約を無視し、ソ満国境を越え侵攻してきたのであります。八月十五日終戦、ソ連は再び国際法を無視し、村上さん等軍人は抑留され、前記述の如き生活をし二年をすごし、復員したのであります。

村上さんが、ソ連抑留中に心配した家族たちの状況は知る由もありませんでした。ひさのさん親子等は、吉林市の難民収容所に避難生活をしていて、その時の征子さんとの生き別れの話は概略次のとおりでありました。

昭和二十一年六月七日、同市の変電所近くで一緒に遊んでいた男の子が「中国人のおばちゃんに、征子ちゃんが連れていかれたよ」と知らせに来てくれたが、それから先、消息がぶつ切り切れたと、日記に書かれたと言われます。「日記は、雑記帳に書かれ、帰国の時、発見されないようにと、バラバラにして密かに持ち帰られた」と、その日記を見せられました。

その日記には次のように書き込んだと言われます。

「夕、雷が鳴る。征子はこわがって泣いているでしょうか、かわいそうでならない。赤毛で目のくるっとした、笑くぼの子、あの子の目、あの子の顔、あの子の手、足。目にうかべ淋しい」

しかし、ひさのさんは二カ月後、うしろ髪を引かれる思いで帰国したといえます。

「征子は必ず中国で生きていると信じていた」というひさのさんは、残留孤児の肉親捜しが本格化した昭和五十年から、ラジオ講座で中国語の勉強を始め「征子と会えた時、話があったからです」と言われる。その後の昭和五十年七月、吉林市を訪れ、征子さんの行方をたずね歩いたが、その時は目的を果たせなかった。しかし、母親の執念が、今から十六年前、昭和六十年に実現したわけでありませう。

征子さんが不明になったのは、満三歳数カ月であったといえます。父は、軍人としてシベリア抑留、母は引き揚げ、長女と生き別れ、その征子さんは、孤獨で

満州に。約四十年の歳月間、今次大戦の労苦でありました。

【解説】

ソ連の侵攻

ソ連軍の突如進攻前、昭和二十年八月初頭の関東軍の状況は次の如くであった。

いわゆる「満州根こそぎ動員」による新設部隊は、七月末主要部隊の人員を概ね充足したが、装備の整わない部隊が多く、その戦力は微弱であった。又既設兵団の大部は、未教育兵の教育等に必要な人員及び火炮等を本来の駐屯地に残し、その他は挙げて新たな主陣地に赴いて築城作業に没頭していた。なお第五軍では、隸下兵団長、参謀長の全部を掖河の軍司令部に集め、八月七日から高等司令部演習を実施中であった。

八月五日虎頭（興凱湖東北方一二〇キロウスリ―河岸）南方地区に約百人のソ連軍が越境し、我が監視哨に射撃しつつ近迫してきた事件が起こったが、第一線では我が方が隠忍自重すれば彼もまた自然に後退する

従來の例と同一視する傾向があつた。

「ソ連軍の急襲——九日午前零時」八月八日夜、滿州は降雨断続し、天地暗澹としていた。九日午前零時頃ソ連軍飛行機の越境を各所に認めたが、午前零時稍々過ぎ虎頭及び五家子（琿春東南方約三〇キロ）の我が陣地は共にソ連軍の砲撃を受けつつある旨を報じ、次いで東正面の国境監視部隊はいずれも敵襲を報じた後連絡を絶つた。

第一方面軍司令官喜多誠一大将は、直ちに「方面軍作戦計画に基づき速やかに態勢を整え侵襲する敵を破摧すべき」旨を隷下全軍に命令した。

以上の状況に接した関東軍総司令官は、午前二時左の要旨の関東軍命令を発令した。

- 一、東正面の敵は攻撃を開始せり。
- 二、各方面軍、各軍並びに関東軍直轄部隊は夫々侵入する敵の攻撃を排除しつつ速やかに全面開戦を準備すべし。

次いで各方面からの報告により、ソ連軍全面攻勢開

始は明白となつたので、関東軍は午前六時までの間に「各方面軍及び各軍は夫々関東軍作戦計画に基づき侵入し来る敵を撃破すべき」旨を発令すると共に、「国境警備要綱」を廃棄して行動の束縛を解いた。また「戦時防衛規定」及び「滿州国防衛法」の発動による日滿一体の戦争態勢に移行する如く措置するところがあつた。

かくて関東軍は、ソ連軍急襲を受けて立ち上がった。しかしながら対ソ戦は、我が方の物心両面の準備が不十分の時期に容赦なく始められてしまつたのである。

樺太方面においては、八月九日午前六時以降わが国境監視哨はソ連軍の砲撃を受け且つ通信線を切断せられた。南樺太の豊原に位置していた第八十八師団長峰木十一郎中将は、八月九日午前五時米側放送によるソ連の対日宣戦を知り、直ちにまず国境方面の部隊に対し予定計画に従つて速やかに防禦態勢を整うべきことを命じた。

〔大本營の処置〕ソ連の参戦とソ連の滿州侵攻を

知った大本営は、八月九日對ソ全面作戰發動の準備を命令すると共に、支那派遣軍の南滿方面転用準備兵力等を指示し、次いで翌十日對ソ全面作戰の開始を命令した。なお関東軍に対しては十日の命令と共に「作戰の進捗に伴ひ適時總司令部を作戰地域内におけるその他方面に転移することを得る」旨を指示した。

大本営は更に八月十四日、支那派遣軍に対し「関東軍の作戰を容易ならしめるを主眼として作戰を律す」べき旨を命令すると共に、「まず第一軍司令部及び少くとも二師団基幹の兵力並びに所要の軍需品を速やかに滿鮮方面に転用す」べき指示を發した。

日本軍の建軍以來初めて遭遇した降伏は、將兵に大なる衝撃を与えた。「今はこれまで」と自決の途を選んだ人々は、第一百十二師団長中村次喜藏中將、同師団參謀長安木亀二大佐、東寧重砲兵連隊長渡辺馨大佐、機動第三連隊長若松滿則中佐等をはじめ数多くあった。また降伏を肯んぜず、自由行動に出た將兵もかなりの数に上がったようである。

在留邦人の悲運

国境方面の在留邦人は、ソ連軍の侵入と共に鉄道、自動車によつて後方都市に避難を開始した。しかし予期しないソ連軍の早期侵攻と急進撃によつて、鉄道不通となつた方面及び奥地の開拓団等の邦人は、徒歩で後退した。これらの人々は途中ソ連軍の攻撃を受け、あるいは匪化した滿人の襲撃略奪を蒙り、飢餓と病気に苦しみ、斃れる者教知れず、その惨状目を蔽わしめるものがあつた。また国境陣地に入つて守備隊と共に玉碎した人々もあつた。

関東軍は、十日主要都市の邦人を後方に避難させる措置をとり、また新京（長春）地区の邦人を一般市民、国策会社、官、軍の順序に避難させることを滿州国政府側に要請すると共に一〇列車を用意し、その第一列車は十日夕新京駅を出発し得る如く準備した。ところが、長年住みついた邦人の避難は、到底急速に実行できない実状にある旨の回答が関東軍になされた。よつて関東軍は已むを得ず手輕に動かし得る軍人軍属の家族から輸送を開始することとし、急遽着のみ着の

まま強制的に出発させた。

軍関係の家族が動くや満鉄の家族が動き、ついで一般邦人に及び新京駅は大混乱を呈した。しかしこれら先に避難した人々も、後日平壤地区において悲惨な運命に陥ったのであった。

終戦と共に無警察状態に陥った満州及び三八度線以北の北朝鮮地区の邦人は、到る所で満人、朝鮮人の略奪を蒙った。更にソ連軍の各地占領後は、ソ連兵の婦女に対する暴行、あるいは物品の強奪はその停まるどころを知らず、これを拒否せんとする者は即座に銃殺せられ、また生き延びて後方地域に辿りついた奥地からの避難邦人も飢えと疾病のため死亡するもの相つぎ、言語に絶する地獄の惨状を呈した。

九月初めまで新京に軟禁状態で残っていた関東軍の幕僚は、邦人の救出を焦眉の急とし、再三東京との直接連絡を要請し中央部もまたこれを実現せんとしたが、ソ連軍の拒否によって不可能であった。当時の関東軍幕僚の悲痛な焦慮は、次の如き電文となって中央部に寄せられている。

八月二十九日 「……二カ月後の寒季と逼迫せる食糧問題とを控え真に憂慮に堪えず、これが善処に

関し国家として全幅の努力を払はるるの要ありと思考す」

八月三十日 「新京に在る避難民を見ても僅かに持ち出せる手回り品すら略奪せられ、また数日絶食の者すらあり……採暖用石炭は労力あるも輸送認可せられず、而も衣糧寝具住宅等は徵発又は略奪せられ冬に入らば餓死者凍死者の続出を憂慮せらる……当地ソ連軍首脳の内意を糺したるも東京において取極めらるべしとて何等の措置を講ぜず当方にては全く手のつけようなし……速やかに内地送還をなし得る様至急御補助相煩度願す」

九月二日 「……近く寒気を控え避難民約四十万人（在来の居住者約三十万人を加え邦人約八十万人）南滿一帯に充満し食なく住居なく金銭なく如何とも為し難き実情なるを以て遅くも十一月初旬頃までに……（以下電文未着）」

昭和二十一年初頭、国民政府側がソ連軍に代り満州を接收するに及び、邦人の管理は不自由ながら軌道に乗った。これは蔣介石主席の「恨みに報ゆるに暴を以てする勿れ」という精神の賜である。

〔戦史叢書〕より抜粋)

満州では五年兵

朝鮮半島縦断帰国

福岡県 神代 国 男

大正九（一九二〇）年十一月二十六日、三池郡高田町大字梅田の農家の次男（兄は幼少の頃に死亡し妹一人）として生まれましたが、父は昭和三十三年（一九五八）年四月二十一日に死亡、母は戦時中の昭和十九年一月に死亡しました。

昭和十七年、母は私が戦友の遺骨宰領のため、久留米連隊に帰って来た時は生きていて喜んでくれたのですが、人の運命などというのは分からぬものだと後に

思いました。しかし考えてみれば、外地勤務で会えぬ、帰れぬのに、一度帰って顔を見せたのですから、幾分諦めはついたのですが、残念でたまりませんし、今でも母のその時の姿を思い出すことがあります。

私は、昭和十六年二月二十二日、大阪の部隊に集合し、三月一日、満州の独立守備第一大隊第二中隊に入隊しました。満州の部隊までは、貨物船で大連へ、列車で奉天駅（瀋陽）に着きました。

第一守備隊の第一・第二中隊は奉天、第三中隊は撫順、鞍山でした。南部防衛司令部には四個大隊編成で、私は第一大隊でした。毎年四個大隊の十六個中隊が、奉天で剣術の試合をやりました。その時代、現役の勤務期間は、内地は二年ですが、満州の独立守備隊は三年間で除隊でしたから、外地であるのに内地より一年間勤務が長い。これは、一応戦地であったからかもしれません。

三月、四月、五月と経過し、一期の検閲が終了すると、もう六月の末には、八路軍討伐のため北支へ行き、三カ月間、初めて戦地の体験をしたのです。その